英知通信

発行
英知大学
兵庫県尼崎市若王寺
2－18－1（〒661）
TEL（06）491－5083
編集
英知大学広報室

昭和63年1月20日　英知大学　No.53

開学記念講演会並びに第十三回親睦パーティ開催

絶好の秋日和に恵まれた十一月一日（日）に、恒例の本学開学記念講演会並びに後援会主催第十三回親睦パーティが催された。この親睦パーティは後援会が先生方を招待して、昼食を共にしながら学生の事や大学の教育等について歓談すると共に、相互の親睦を深めるために毎年開催されているもので、本年は十三回目であった。

当日は本館四〇一教室で午前十時半から、本学教授の加藤智満子先生が「女神の復活」と題して講演され、父兄、教職員並びに人間関係講座等の約百五十名の聴衆に深い感銘を与えた。（別掲講演要旨参照）

続いてクラブ活動を一層盛んにするためのクラブ奨励金の贈呈式が行われた。後援会長の挨拶、学長の激励の言葉に引続き、後援会長より体育系十五部の奨励金を体育局長に、文化系十二部の奨励金を文化局長に贈与され、学生会長が謝辞を述べ、一同激励の拍手が続いた。

更に正午から学生食堂で親睦パーティが行われた。菅野会長並びに井上学長の挨拶があり、山本監査の発声で乾杯し、会食・懇談に入った。

最後に菱田副会長が閉会のことばを述べた。パーティの参加者は前日の雨で減少し、父兄七十三名、先生二十名で、中には東京・岐阜・愛媛・岡山県から参加された方もあり、夫婦同伴の出席も十七組あった。各学科、各学年別に十のグループに分かれ、グループ毎に授業担当の二名の先生方を囲んで着席し、和やかな雰囲気のうちに子女の教育や当日の講演内容等について熱心な話し合いが続いた。閉会後、父兄は学生の催し物や模擬店などに立ち寄って、学生と共に和やかな学園のひとときを楽しんでおられた。

第二十一回英南戦

十一月十四日（土）・十五日（日）の両日、名古屋の南山大学において今年で二十一回目を迎える英南戦が催された。

十四日の朝、応援団のエールが寒空に響く中、我が英知大学の選手一九〇名は大型観光バス四台に分乗して、午前八時本学を出発した。しかし、途中交通渋滞に会い南山大学に到着したのは、予定よりも三十分遅れであった。

十二時四十分より同大学体育館において開会式が行われ、両学長がそれぞれ挨拶を交わした。その後、本学硬式庭球部の男子部長と南山大学硬式庭球部の女子部長によって選手宣誓が行われた。開会式と同時にスケジュールの都合上、洋弓男・女の試合が行われた。開会式終了後、二時よりバドミントン部男・女、硬式庭球部男・女、二時四十五分よりサッカー部の試合がそれぞれ行われた。結果は洋弓部男・女、バドミントン部男・女が敗退し、サッカー部は引き分けた。硬式庭球部はこの日勝ち越し、翌日の試合に備えた。剣道部は交歓会として合同練習が行われた。

翌十五日にはバレー部男子、卓球部男子の公式戦、そしてバスケット男・女のオープン戦が行われた。残念なのは予定されていた硬式庭球部男・女の公式戦が雨天のため、中止となった事である。結果は各種目、力及ばず惜敗し総合成績九対一、引き分け一で南山大学の優勝に終った。

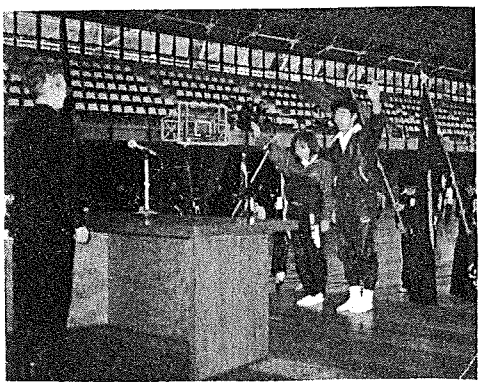
今回の結果で明らかな事は、一年間を通じてよく練習しているクラブはその成果が随所に見られた。「我々は素人集団である。技術面では勝ち目はない。練習ではとにかく走り込みをして、体力面で勝負するつもりだ。」試合前にサッカー部主将の廣岡太郎君はそう語った。バレー部男子も南山から一セットを取り、これからの自信となる価値あるものであった。

英南戦のマンネリ化を避ける方法はただ一つ、英知大学が強くなることである。そのためにも、もっと練習を重ねようではないか。春休み、夏休みの体育館はあまりにも静かだ。

最後に英南戦の実行に当たり、ご協力頂いた先生方並びに関係者、実行委員、選手諸君に改めて深く感謝いたします。

（学生会体育局長　東川　要）

第二十四回英知祭



第二十四回英知祭は、十月三十一日の前夜祭より十一月三日までの四日間「レトロな気分で……」をテーマに本学キャンパスで開催された。

三十一日の前夜祭では恒例の田吾作コンテスト&大行進が行われ、園田駅前でのEVENTは例年にみられない盛り上がりを見せた。

一日からは、各クラブや有志による模擬店が学生会館前に立ち並び、学館二Fでは西語劇、英語劇につづいて劇団REDSの公演が行われた。また特設ステージでは、カラオケ・フェスティバルや勝ち抜きエレキ合戦が行われ、それぞれ自慢の声や技を競い合った。当日は大学の講演会や後援会の親睦パーティが行われたので後援会や同窓会の方々も各会場に続々とこられ、声援と笑い声がうず巻き、英知ファミリー一色に染った。二日は学館で学内コンサート、またステージでは恒例のギネスof英知などが行われ、グラウンドではソフトボール大会が行われた。

最終日の三日はあいにくの雨で↙

（五頁五段へ続く）

開学記念講演（要旨）

「女神の復活」

英知大学教授　加藤智満子

男性優位か、女性優位か

以前、朝日カルチャーセンターで社会人の方々に神話の話をしていた時に、「神様という言葉を聞くと男の神様と女の神様とどちらを想像しますか」と質問しましたら、女神を想像するという答が多かったので、ちょっと驚きました。日本の現代人は「父なる神」というようなキリスト教の観念が強いのではないかと思っていましたが、母親的なイメージは日本人にとって、やはり強烈なのになぁと感じたことでした。

日本の神話で一番えらい神様は天照大御神で、太陽の神とされていますが、太陽の神が日本のように女神というのは、世界でも珍らしい例です。昔から日本は中国文明の圧倒的な影響を受けてきましたから、儒教的な男尊女卑の風に染まっていて、表向きは男性優位ですけれども、意識の下では大昔からの女性原理が働いているように思います。

例えば夫婦の間柄で、夫が妻を呼ぶのにママとか、お母ちゃんと呼んでいる家が随分ありますが、これは自分の子供を媒介にして自分の子の母親であるから、お母ちゃんと呼んでいる訳ですが、じっさいに妻に甘えているような感じがします。昔の大名や侍の家ではお殿様とかご主人様とか言うのは片ひじ張って威張っていなければならなかったが、町人の家ではおかみさんの権限はかなりのものだったと思います。落語の熊さん、八っつぁんの世界では、大概おかみさんの方が利口で、ご亭主は少し抜けているというパターンが多いようで、つまりそんな家庭が面白がられたわけです。

うちの山の神という言い方も、神話学的に見ますとこの冗談にはかなり真実味があって、山の神というのは必ず女神ですから、うちの山の神と言って冷やかしている裏にはやはり亭主である男性たちの女に対するひそかな畏れみたいなものが――畏れというほどではないまでも、同じレベルではちょっと扱いにくいような、そういう存在に対する冷やかしみたいな、逆にそういう畏れが男の自尊心によって変形されて、女に対する軽蔑という体裁をとっているように思います。

尼崎には広済寺という近松門左衛門の菩提所がありますが、その近松門左衛門が書いた浄瑠璃の心中物「曽根崎心中」とか「心中天の網島」という男女の悲恋物は、主人公の名前で呼ばれることが多い。外題の他に男女一対の恋人の名前を劇の題名にして、小春治兵衛とか、お初徳兵衛とか近松ばかりでなく、そのほか、おはん長右衛門とか、三勝半七であるとか、みんな女の名前の方から先に出てきます。

ヨーロッパでは「ロメオとジュリエット」とか、「アントニーとクレオパトラ」とかいう風に必ず男の名前の方が先に出てきます。日本の場合、女の名前を先につけると、口調がいいせいもあるが、何となく女性優位な感じもする。町の町人――庶民の間では、おかみさんの権威というのはかなりなものであったようで、大阪の船場あたりの商人の家では、娘に養子をとって跡目を継がせる習慣があった。つまり一種の母系制度で女の血筋を重んじていたわけでしょう。男女平等がうたわれるようになった現代では母親のイメージがますます強烈になって、悪評高い教育ママとか、ステージママとか、圧倒的な存在感を持って来ました。

大昔の女性とギリシャ神話

さて、大昔の女性はどういう存在であったかを知るには神話を見るのが一番だと思います。大昔、歴史的な記録が何も残っていない、いわゆる先史時代の事を調べるには、発掘された考古学的資料とか、或いは伝承された神話を研究する以外に方法がなく、神話を研究する事は先史時代を研究する先史学とほとんど同じと言ってもいいと思います。

神話は古代人の宇宙観、人間観、そしてもちろん宗教観を、実によく教えてくれます。先史時代の人たちが神様とか、男とか、女とかをどう考えていたかという事が神話にまざまざと表われているのです。男神とか、女神と言っても、地上の男や女の投影に過ぎませんので、結局その時代の男性や女性の社会通念に合った理想が女神男神の姿になっていると考えられるからです。大昔女性はどのように考えられていたか、どのように尊ばれ、どのように卑しめられていたか、そうした事は神話を読むと手にとるように分かります。

本日はギリシャ神話の中からよく知られた話を一つ取り上げて、大昔の女性観がどのようなものであったか、また女性観がどのように変ってきたか、考えてみたいと思います。ギリシャに限らず、この地上の多くの民族が天地創造の、あめつちの始まりの時にどのようにして人間が造られたかを語っていますが、世界で最も広く知られ、親しまれている神話、つまり旧約聖書の創世記とギリシャ神話の中で、女はたいへん損な役割をわり当てられています。

もっとも創世記を神話と呼ぶと叱られるかも分かりませんけれども、神話というのは何もでたらめなおとぎ話という意味でなく、民族の最も大事な伝承です。その意味で旧約の創世記はユダヤ民族の立派な神話と呼んでも差し支えないのではないかと思いますが、その創世記の中で、人間の最初の女、エバというのは実に芳しからぬ役割を担っております。ご承知のように天地をおつくりになった神様は、植物をつくり、動物をつくり、最後に人間をおつくりになりますが、人間といっても男性であるアダムがつくられる訳で、アダム一人では淋しかろうというのでしょうか、後からアダムの肋骨の一本でもって女性がつくられた。

こうしたつくられ方からして女性の比重は軽いのですね。もっともこの肋骨というのは学者によりますと、それ以前のシュメール文明の神話の影響を受けていて、シュメールでは心と肋骨とは同じ楔（せつ）形文字で表わされていたとかいう説がありますが、とにかくその最初の女、エバが蛇である蛇に誘惑されて、神様が絶対に取ってはならないと戒めておかれたいわゆる禁断の木の実を取ってアダムと一緒に食べた。そのために、アダムと共に楽園を追われたという話で、要するに人類が楽園を追われて、額に汗して苦労しなければならなくなったのは、ひとえにエバの軽はずみな行為からであると、実に女は災いの元であるという話になっています。

最初の女性パンドラ

ところで、ギリシャ神話の方では最初につくられた女性はパンドラと呼ばれておりますが、このパンドラもまた人類の災いの元である点においてはエバに勝るとも劣らぬというよりも、エバよりも格段と凄（すさま）じい存在になっています。パンドラ神話は最近では中、高の英語の教科書などにも、あまりひどいところを和らげた形で入っており、「パンドラの箱」というのは子供でも知っているお話ですが、じつはパンドラの箱でなく、「パンドラの甕（かめ）」でなければならないのです。

最初の女パンドラがつくられた次第を詳しく語ったのはヘシオドスという紀元前七～八世紀の叙事詩人で、この人は二つの大きな叙事詩を書き、その二つに少しずつパンドラの事が書いてあります。

ギリシャでは太古の昔から人類は存在していたらしいのですが、女は存在しておりませんでした。男ばかりの男類というような人類が存在していて、男ばかりで大変幸せに暮していました。病気もなく、何の苦労もなく、幸せな、いわゆる黄金時代でした。それが銀時代となり、青銅時代、鉄時代とだんだん人類が悪くなってくるのですが、せっかく男ばかりの古き良き時代であったのに、何故女がつくられたかと申します

と、或る時、ギリシャの神々の中で最高の位置にあるゼウスという神様が、人類に災いを送ろうとしておつくりになったという事になっております。ヘシオドスという詩人は余程女にひどい目にあわされたのか、ヘシオドスの女性観はとても偏ったもので、自分の詩の中で、女に心を許すのは詐欺師を信用するのと同じことなどと言っています。

ところで何故神様が人間への罰として女をつくったのでしょうか。ヘシオドスによれば生贄（いけにえ）の捧げ方について人間と神々とがもめた事があります。その時、プロメテウスという神様が神々と人間の調停役になりましたが、この神はゼウスなんかとは毛色の違った神様で、非常に人間びいきでした。

生贄の牡牛の分け方をプロメテウスがこんな風に決めたのです。まず、おいしそうな肉と栄養のある内臓とを牛の胃袋でくるみ、それを人間の前におきました。次にうまく骨ばかりを組み合わせて、それをおいしそうな脂肪でくるみ、それを神様の前に置いた。そしてゼウスに向かってどちらでもお好きな方をお取り下さいと言うと、おいしそうな脂肪でくるまれた方を神様はお取りになって、開けて見たら骨ばかりであった。それ以来生贄を捧げる時に人間は骨を燃やして煙だけを神様に送り、人間は実質的な肉と内臓を頂くことになったといいます。

ところがゼウスはこんなこざかしい策略を用いて人間に良い分け前を与えたプロメテウスに対して非常に怒り、人間にも怒り、人間から火を取り上げてしまいました。火を取り上げられると人間は獣並みの生活しか出来なくなるので、あくまで人間びいきのプロメテウスは火を神々の所から盗んで、茴香（ういきょう）という中が中空になった植物の中に火を隠して運び人間に与えたと言われている。地上の人々が明るく火をともしているのを見ると、ゼウスは憤慨してプロメテウスに、「お前は智恵者だが、火を盗んでうまくだましおおせたと思っているのか。この事はお前にとっても、人間にとってもひどい災厄になるのだぞ。火の代償として、わしは人間どもに災いを与えよう。彼らは皆その災いを心から喜び、愛し抱擁する事だろう。」こう言ってゼウスは高らかにお笑いになった。こうして男ばかりの人類に女が与えられる事になりました。

キリスト教の愛

えらい神様である筈のゼウスが、人間に罰を与えておいて、小気味よげにお笑いになったのに比べますと、キリスト教の神々しい愛の神というような高められた神のイメージが、如何に古代において優れたものであったか、ホメロスやヘシオドスの神の概念と如何にかけ離れたものであったかという事がよく分かります。

またイエス・キリストが「汝の敵を愛せよ」と言われたのは、革命的な事です。今でこそこういう言葉は聞き慣れておりますが、昔の人にとって「汝の敵を愛せよ」なんてとんでもない話で、自分の味方は愛するけれども敵を憎むのが正義であったのです。ですからこの「汝の敵を愛せよ」と言うような非常に崇高な愛の観念はまだ、その当時のヨーロッパ人はもっていなかった。神様といっても、人間の王様程度の偉大さであって、神さまが人間に惜しみなく愛をそそぐというようなことは、ギリシャ人には考えつかなかったのです。

さて、人類に火を与えてくれた方のプロメテウスは罰としてコーカソスの岩山に縛り付けられて、毎日ゼウスの送る鷲（わし）に肝臓をつつかれるというひどい罰を受けることになりますが、その話は今はさておきます。最初の女パンドラはどういう風につくられたかというと、ゼウスの意志により、ヘパイストスという足の悪い技術者のような神様が、土から非常に美しい乙女をつくり上げ、色々な女神が寄ってたかって飾りたてます。美しい衣を着せ、帯をつけ、花冠をかぶせて見事な気高い美しい乙女が出来上がります。最後にヘルメスという小さい頃から非常にうそをつくのがうまかった神様が、うそとへつらいと人をだます性（さが）を女の心の中につくりこみました。その乙女はパンドラと名付けられました。すべての神々（パンテス）の人間への贈物（ドロン）だからパンドラと呼ばれた、と語られています。この女こそがゼウスが望んだ通り人類不幸の源となったという訳です。

パンドラは外（げ）面女菩薩、内心女夜叉の見本みたいな、見かけは物凄く美しいけれども、内心はうそと欺瞞で固まったような存在で、それだけでも危険な存在であるのに、その上彼女は女の子を生んで女という種族の祖先になったとヘシオドスは述べています。「この女から恐ろしいやから、女共の種族が生まれた。女共は男共と共に暮らし、大きな災いとなっている。貧しい時には連れ添わず、裕福な時だけ富を分かち合う」と。そういう女の性悪な性質そのものが人類の災いとなるのですが、更にその上にパンドラの軽率な行動が取り返しのつかぬ災害を招くことになります。

パンドラのかめ

さきほど申しましたようにパンドラの箱にかめで、ピトスと言って大きな穀物やオリーブ油を貯えておくかめです。パンドラは大きな甕を、神々からの引出物のように携えて人間の男の所へやって参りました。後で事の真相を知って、がっくりするのですが、もう後の祭りです。というのはこの時まで人間は病気もいさかいも飢えも何も知らず、幸せに暮していたのに、パンドラが問題のかめのふたを開けて、中から病気やいさかいや飢えとか、そういういやなものを手ですくってまき散らした。そのためにそれらの災いが忽ち人類の間に広がって、もう取り返しがつかなくなってしまった。そしてパンドラがふたを閉めた時に、たった一つ希望だけがかめの中に残っていたという、全く女が読むと非常に不愉快になる神話です。

さてこのパンドラですが、美しいくせに性悪な根性そのものによって、またかめのふたをとって世界に災害をまき散らしたという行為によって二重に人類の災いになった最初の女パンドラは本当は何者だったのでしょうか。実を申しますと、このパンドラという呼び名は原始的な母権制の社会であったギリシャの土着の人達――先住民族にとっては女神の呼び名の一つであったらしいのです。昔のギリシャでは神様を呼ぶのに（神様に供物を捧げてお祀りする時に）ゼウスならゼウス、アポロンならアポロンとそれ単独で呼ぶ事はなかった。必ず何々のゼウス、何々のアポロンと言って、添え名をつけたので、たとえば大地の女神ガイアを呼ぶ時に、ガイア・パンドラと呼んだのだろうと言われています。

古典時代の華やかな文化を築いた、歴史の主役になる人たちは、バルカン半島の北の方から紀元前二千年頃から何回かに分れて南下してきてギリシャに侵入した人たちですが、彼等は男神である天空神ゼウスを奉じていました。それ以前の土着の人たち――地中海民族などと呼ばれている先住者は父親よりも母親を中心に家庭生活を営んでいて、いわゆる母系制度――母権制の社会だったようです。当然男神より女神の方が大切で、殊に大地の女神を崇めていました。大地は万物を生み育てる偉大な女神だったのです。

その大地の女神の添え名として、パンドラという呼び名があったらしいのです。ヘシオドスの説によりますと、すべての神々が人間への贈り物としたからパンドラという名がついたということですけれども、本当は逆で、すべて（パンテス）を贈り物（ドロン）として人間に与える女神だからパンドラなのだと最近の学者は言っております。文法的にも、この語源説の方が正しいようです。

女性観の変遷

それならば、すべてを恵んでくれる偉大な女神が何故こんな心卑しい美少女になり下がったのでしょうか。何故これ程、価値の下落が行われたか、仮にヘシオドスがよほど性悪女に苦しめられて女性嫌悪に陥っていたとしても、これはあまりな話だと言わざるを得ません。ヘシオドスの個人的な事情はともかくとしても、このパンドラ神話の背後には歴史的な女性の変遷があったと思われます。つまり大昔の人々が原始的な農耕生活をいとなみ、大地を耕し、羊を飼ってのんびりと暮していた時代には、母性原理が強く働いていて、女は大変偉い存在でした。そこへ、バルカン半島の北の方から南下してきたいわゆるドーリス人とか、

イオニア人とか、歴史時代のギリシヤの主役となる人々が南下してきた。そういう征服者たちは戦さが上手で、大変好戦的な民族でした。

こういう戦さ上手の民族は当然の事ながら男性中心になり勝ちです。女性は本質的に非戦闘員ですから、戦さがうまくて大勢の人を力づくで引張っていくような人がギリシヤを牛耳るようになると、女性は歴史の片隅に追いやられてしまいます。大地が動・植物を生み育てるように、女は子供を生み育てます。大地が無かったら、万物が生じ得ないと同じように、女が無ければ人類はあり得ないという事を古い人々は身にしみて感じていた筈なのです。ですから大地が人類よりも古くて根源的な存在であるように、女は男よりも根源的な存在ではなかろうかと古代人は感じていたと思います。女性と大地とが神話のレベルで何時もアナロジーをなして、大地すなわち女神と考えられていたのはたいへん自然な事でした。

ギリシヤには色々な神々がいて、女神の中でも処女神、乙女神というのがあります。例えばアルテミスは典型的な乙女神ですが、何時も野獣を引きつれ、弓矢を身に帯びて野山を駈け回っています。月の女神とも同一視されるけれども、とにかく典型的な処女神である。そのアルテミス（ローマ神話ではディアナ）でさえ、小アジア（今のトルコ）の方へ行くと、豊穣（じょう）多産の女神であって、おびただしい乳房を持った大地の女神の相をとっています。

一般に小アジアやシリアの大女神というのはライオンのような猛々しい野獣を従え、男性神を配偶につれています。その男性神は非常に若い美少年です。配偶者であって息子という感じなのです。そしてその息子ないし配偶者の方は、女神とは比較にならぬぐらい小さい姿で描かれるのが普通です。ここで連想されるのは幼子イエス様を抱いたマリア様の姿ですが、女の姿が大きくて、息子神の方が小さいのです。大地的な女性の力、豊穣多産の力に加え、神憑りし易い巫女（みこ）的な能力が重んじられていた古代においては、知恵は女の所有でありました。大地の女神の神託は女の祭司の口を通して人々に伝えられ、女の口を通して女神が人々を支配していました。日本の昔の卑弥呼なども多分そんなタイプの巫女的な支配者ではなかったかと思います。

また大地に親しみ、薬草の知識を身につけた賢い女たちは、本草学的な知識と巫女的なカリスマ性とによって人々の病いをいやし、或いは麻薬の力によって人々を幻惑しました。この種のタイプの女性で神話でもっとも有名なのは例のメディアです。日本でもお芝居で玉三郎や平幹二郎が王女メディアを主演していますが、エウリピデスの悲劇で有名なあのメディアという女性、この種の霊的な、あるいは魔女的な力を持った女性は、古代では少なくなかったと思われます。

しかし時代が進んで母権制が父権制にとって代わられていく過程で、女性の持つ魔術的な威信は次第に失われて行きました。これは一面では人知の進歩でして、男性が女性について抱いていた幻想が失われた結果、つまり女の正体がだんだん分ってきたという事かも知れません。女は決して知恵の独占的な所有者ではない。それどころか、男よりも弱くて劣っているのではないかという認識が急速に広まって行ったらしいのです。

大地の女神を世界の中枢に据えて崇めていた農耕民族の土地に侵入してきた好戦的な人たちは、男神であるゼウスを最高の神として奉じておりました。このゼウスは天空の神であって雷（いかづち）の神です。大地である母神に対する天なる父神であって、前の世代の神々を打倒して、オリンポスの神々の世界支配を確立した神です。さきほどのプロメテウスというのはその打倒された神々の一人です。

母権制から父権制時代へ

つまり神々の世代交替が行われてゼウスが覇権を握ると、母権制時代の女家長にとって代ってゼウスが大家長として君臨することになります。もともと大地の女神というのは、原母とか太母と呼ばれる偉大な根源的な母であって、自分の存在のために父なる神とか天なる神を必要としませんでした。女性をあれ程軽蔑していたヘシオドスですら、神々の系譜を語った叙事詩の最初の所で、天地発生の時に最初に形を成したのはガイアすなわち大地であると語っています。さて問題のパンドラですが、この旧約聖書のエバに相当する最初の女性パンドラは、ゼウスの意志によって人間への罰として与えられた女性ですが、神様たちが寄ってたかってつくり上げた美少女に過ぎないので、少しも大地の女神らしい要素が見られません。

ただ一つ大地の女神らしい痕跡をとどめているのは例の甕です。甕もいろいろありますが、パンドラの甕は穀物を蓄えておくピトスと呼ばれる大甕で、ふたを開けて、手ですくって中のものをばらまいたというしぐさは、本来は大地の女神が自分の懐を開いて人間たちに五穀の恵みを与えることを象徴していたにちがいありません。ですから甕の中には諸々の災いどころか、穀物とか果物とか、あらゆる人間の養いの糧になる有り難いものが入っていたに違いない。甕はその形からして何となく女性を連想させる器ですけれども、とりわけ穀物を保存するための大甕は、大地の女神と観念的に強く結び付いています。

古代人が大地の女神と大甕とを強烈な観念連合によって結びつけていた事は確実です。パンドラが偉大な大地の女神から品性下劣な美女になり下がるにともない、甕の中身も人々の養いの糧から病気や飢えなど様々の災厄に変質してしまいました。女性の価値がこれ程引き下げられ、おとしめられた事、しかも後世に大きな影響を与えたギリシヤ神話の中で、そういう話が語られたという事は女性にとって大変不幸な事でした。しかし幸いな事にもっと時代が下り、ヘレニズム時代、つまりギリシヤ国そのものは衰えたけれども、ギリシヤの文化があちこちに広まったヘレニズム時代に、地中海世界には極めて有力且つ崇高な女神が崇拝されるようになりました。イシスという女神がそれです。イシスは元々はエジプトのナイル川のデルタ地方のローカルな土着の女神に過ぎませんでした。大地の女神で、配偶者はなく、一人だけの力でホルスという息子を生んでいます。こういう素朴な土着の女神が後にオシリスの妻という事にされ、このイシスとオシリスという一対の夫婦神がエジプトで最も人気のある有力な神様になっていきます。ヘレニズム時代にはエジプトはもうすっかり落ちぶれてしまって見る影もなくなり、ギリシヤ人の王であるプトレマイオス王朝の支配下にありましたが、その時期にこのイシスという女神がエジプトという枠を飛えて、広く地中海世界で崇拝される大女神に成長しておりました。ギリシヤ、小アジア、シリアなど地中海の様々な地域で崇められていた有力な女神たちの性格、属性を一身に集めて、イシスという女神は国籍を越えた大女神（じょしん）に進化していきました。

イシスの神殿の碑文とマリア像

エジプトのセイスという町のイシスの神殿には次のような碑文が刻まれております。「我イシスはかつてありしもの、今あるもの、やがてあるであろうもののすべてである。いかなる人間も我を明らかにすることはできない。」これは過去、現在、未来にわたって永遠に在る神を証しする碑文であって、ここでは大地の女神が遂に大地の重力から自由になり、ほとんど絶対的な神に高められた事を明らかにしております。しかしこの女神イシスもまた他の古い神々と共にキリスト教に敗れ去ったのですが、しかし完全に死んだのではありません。姿を変えて生き残ったと言うべきでしょうか。イエス様をお生みになったマリア様はキリスト教、特にカトリックやギリシヤ正教でことのほか崇拝されていますが、このマリア様の中に古代の女神たち、偉大な母神たち、とりわけ崇高なイシスのイメージが残されている事を否定する事は出来ません。

ここにはキリスト教学ご専門の先生が大勢いらっしゃるのに、こんなことを申し上げるのは大変面はゆいのですが、キリスト教は父なる神とその御子イエズスを絶対の神とする父性原理の宗教ですけれども、人類が男性ばかりで成り立っているのではない以上、母性原理を全く無視する訳にはいかないと思います。そこでマリア様の姿が大きく前面に出て

きたのではないかと推察いたしております。カトリック教会には幼子イエス様を抱いたマリア様のお像が必ず見かけられます。

ギリシャで聞いた話ですが、ギリシャ正教の信者たちは願い事をするのに、まずマリア様を拝み、「マリア様どうぞ子供を授けて下さい。マリア様どうぞ自分の家内の病気を治して下さい。」とマリア様にお願いしているという事です。厳密に言えばマリア様は神様ではないのですけれども、マリア信仰、マリア崇拝というのは厳然として存在しております。そしてそれは、むしろいい事ではないかと私は思います。積極的な意味を感じさえします。

日本でも江戸時代、キリシタン弾圧が行われていた時に、隠れキリシタンたちが秘かに観音様のお像の裏に十字架を刻んだりして拝んでおりました。いわゆるマリア観音です。観音様は別に女性というわけではないのですけれども、何となく女性的な姿で表わされていて、やっぱり仏教の中における一種の女神的な存在です。観音様とマリア様を結び付けたのは、弾圧されたキリシタン達の苦肉の策であったでしょうけれども、或る意味ではとても自然な発想であったと思います。

こういうふうにして父性原理のキリスト教信仰の中ですら女神的なるものが根強く残っているわけでして、今後女性の位置がもっと高くなり、本当の男女平等が実現された暁には、男神と女神との力関係はどうなるのだろうかと私は大変興味をもって成り行きを見守っている次第です。女神の復活、成るや否や、と。長時間、どうも御静聴ありがとうございました。

（小見出し並びに文責は広報室）

＜研修旅行＞ パリで見つけた忘れ物

仏語仏文学科三回生 岡本亜矢香

青と白のアパルトモンがまっすぐ建ち並ぶラスパイユ通り。ホテルの窓から見るマロニエの並木道は、まるで美術館の廊下のように美しい。道端に佇む英雄達も、石畳の道も、何もかもが素晴らしく綺麗なのだ。パリ、それは世界一大きな美術館。どこを見ても美しい風景画があり、耳にとび込む言葉までが歌のようにリズミカルで心地良い。なにもガイドブックを片手に凱旋門やエッフェル塔を訪れなくても、充分心を満たしてくれるのが本当のパリだった。

シャルル・ド・ゴール空港からのバスで、最初に感じたパリの印象がこれである。

私達の研修旅行はアムステルダムでの観光を終えて、このパリにおいて本格的に始まった。第一日目に私達が泊まったホテルは、古くから学生の町とされているカルチェ・ラタンのラスパイユ通りに面しており、近くには私達が通った学校もある。

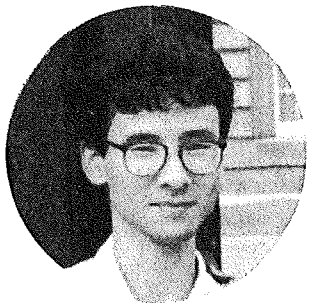
授業は二十名程のクラスに分かれ、文法より会話重視で行われた。教師の質問に我れ先にと答える学生達、その活気に溢れた外国人学生を見て、日本人が内気だというのは本当だと思った。内気というより消極的だというべきか。私もその一人だが、まわりに圧倒され呆気にとられた自分が情けなく、悔しかった。何にしろ書かれたフランス語は理解できるのに、耳に入るフランス語は音楽のようにただ流れていくばかりなのだから……。何度間違いを注意されても、平気でまた間違う女学生、私は彼女から語学を身につける方法を教わったような気がする。

長い歴史と伝統をもつフランス、そして同じように古い国、日本。これまでとにかく外国に憧れ、目を向けてきた私は、その美しさと重さを肌で感じた時、自分の愚かさを目の当たりにした。私は自国の歴史や文化を深い理解のもとに誇りとしている彼等を見て、目新しいものに心を奪われ自国の歴史も満足に説明できない自分に気がついたのだ。

雨が降っても傘をささない人混みに立ち、名もない教会にフランスを感じた時、私は無性に日本を知りたくなった。もしも今以上に私が日本の美を知っていたなら、フランスをもっと強く広い意味で、素晴しいと感じることができただろうに。そう思うと残念だが、私は知らぬ間にポケットから落していた二つの大きな忘れ物を、このパリで見つけたような気がして満足している。

＜研修旅行＞ 英国・メモランダム

英語英文学科三回生 水阪 修



八月二十二日朝、私達は英国に向けて研修旅行に出発、まず成田で飛行機を乗り換え、途中アムステルダムとパリに休憩後、二十五日にロンドン入りをした。わずか三名による旅行は、ホームスティをしながら市内見学をした。三人別々のホームスティであった。ホスト・ファミリへ向かう際は、ガイドの方に途中の駅まで送ってもらい、そこから列車に乗り、ロンドンから約三十分の所の駅で降りた。この間にガイドの方が駅へ迎えの電話を掛けて下さった。ところが改札口にはそれらしき人はおらず、だんだん心細くなりながら三十分ぐらい待っても来ないので、売店のおばさんに住所を見せながら道を尋ねると、横に記されていた電話番号に気づき、その方の家へ電話を掛けてくれた。そして、迎えの方が見えるとホッとし、挨拶も忘れていた。

翌日からホテルにいる井田先生の所へ集合し、あちらこちらを見学、大英博物館・衛兵交代（バッキンガム宮殿）・ロンドン塔・マダム・タッソー、郊外ではケンブリッジにも行った。

全体的な印象として、古い建物には歴史の重みが感じられ、ロンドン塔から見た市内やテームズ川の景色も美しく、グリーンパークなどは、芝生の緑、咲き乱れる花も美しかった。ケンブリッジは、まだ学生の夏休み中だった事もあり静かだった。

地方では、ウィンダミア（ワーズワースの出身地）・エジンバラ・シェークスピアのゆかりの地、ストラトフォードを訪問。ウィンダミアは湖と緑に囲まれた所で「自然の美しさ」に魅せられ、詩人ワーズワースの生家や後に引っ越しをした家も見学。生家は、この地方の田舎家そのものだった。エジンバラでは城へ向かう新市街から見た景色が今でも目に焼きつく。残念ながら城へは行けなかったが、ストラトフォードは、シェークスピアの家、墓地・彼の妻の家、夜は劇場で喜劇「じゃじゃ馬ならし」を観劇、面白い場面が多くみられたが、作品としては理解しにくい。墓地は教会の中にあるのだが、撮影禁止であったが、金の十字架が印象的であった。

再びロンドンへ戻ってからは自由に行動をした。ハイド・パーク・テームズ川沿いを散歩した。テームズ川とパリを見学した時のセーヌ川、何か共通する点を感じた。

三週間という日程で素晴しく楽しい思い出になった英国、今度は英語を上達させてから訪問したいと思う。

↙（一頁より続く）

あったが邦楽演奏会、あなたが選ぶ「Miss・英知」のほか、元ボクサーの赤井英和氏の講演会など順調に行われた。夕方からは学館一Fで軽音の生演奏を聞きながらのビアパーティが行われ、最高の盛りあがりの中で第二十四回英知祭は四日間の幕を閉じた。

（大学祭副実行委員長 黒川隆文 記）

学生俳壇

助教授　岡田彰子

もう大分前のことになりますが、国語国文学の授業の夏休みの宿題として俳句を一人に五句ずつ作ってもらいました。

ある日、国際交流委員会の室で、ローラース大学のビル・ポーリー先生が俳句に深い知識と興味をお持ちになり、日本から行った英知大学の学生達に俳句について、いろいろお教えになるということを聞ました。俳句は最近、アメリカを始めヨーロッパ諸国で大へんなブームになっていますが、現在、松尾芭蕉の勉強をしている英知大学の学生達にも是非俳句を作ってもらおうと思いました。

いよいよ出来上った作品は皆非常によくできていました。一人が五句作りましたが、その中から私が一句を選び、それを集めて「学生俳句集」を作りました。それを基にクラス全員で俳句大会をしました。最多数を得た人は金賞、二番が銀賞、三番が銅賞を受けることにしました。皆よくできていたのでAクラスでは最高点の金賞に次ぎ、一票の差で五人が続きました。その人達は皆銀賞としました。では、その六人の俳句を発表します。

夕焼けにそまり流るうろこ雲
清水正樹(仏・I)

箏の音に合わせし虫の夜深し
塩崎浩子(仏・I)

自転車のペタルもかろし萩の道
青木美幸(仏・I)

こつこつと柄杓(ひしゃく)を当(あ)てて墓洗う
松田敏子(仏・I)

夏の朝夢破らるる蝉の声
斉藤　学(神・I)

花火散る港神戸を彩りて
西宮紀江(英・I)

Bクラスも皆よくできて、最高の金賞に次いで、一票の差で銀賞二人が同点で続きました。

美しく恋も知らずに散る花火
紺谷紫保(仏・4)

流れ星願う間もなく消えにけり
石本好美(英・I)

雪だるま短き命ほほえんで
内海行孝(英・2)

その他にも佳句がありましたので紹介しましょう。

鰺(あじ)の目やうらむがごとく皿の上
松本時哉(英・I)

食卓に出されたお皿の上にのっている鰺の目が、いかにも今から食べようとする自分を恨んでいるように見えると、鰺の目という小さい物を観察する作者の眼の鋭さがわかります。

秋近しひとつの恋の消え果てて
日野浩二(英・I)

楽しかった夏の青春の一時も、秋の到来とともに消え去った寂しい心をうまく表現しています。

その他、いい句が多数できましたが、今回はこれまでにします。自然の美しさに打たれた時、毎日の生活の中で、フト感じたことを十七文字に入れて表現して下さい。人生が豊かになるのではないでしょうか。

第一回英語スピーチコンテスト

昭和六十二年十二月十二日、英知大学主催、第一回英知大学英語スピーチコンテストが学生会館にて行われた。当初、第一回目とあって、何人の出場者が参加するか予想がつかなかったが、最終的に十九名の学生が出場した。このコンテストは、英語での教育を半年以上受けた人以外は、本学学生であれば学科、学年に関係なく出場できる事になっている。出場者は各自、　で作成した原稿を当大学のアシスタント教員であるリサ・ウィースリーさんに添削、指導をしていただきコンテストに臨んだ。

当日、井上学長、ヴィデーウス先生、井勢先生、フィナティ先生、金先生を審査員にお願いし、またリサ・ウィスリーさんが司会、進行役をつとめられた。

コンテストの結果、第一位に英語英文学科四回生、久宗史枝さん、第二位に同四回生、福島裕美さん、第三位に同一回生、小西健二君が選ばれた。

時代の国際化に伴い、英語で自分の意見を述べる機会も増してきつつある。その力を試す場として今後もより多くの学生が参加する事が望まれる。

(国際交流委員会　楠川知子　記)

ローラス大学ミラー教授にインタビュー

本学の姉妹校ローラス大学のミラー教授夫妻が九月二十八日来学され、十二月十日帰国されました。その間、フィナティ先生ご出張中の授業をお手伝いして下さっていましたが、ご帰国前の十二月二日、国際交流委員会委員長の松本信愛先生に在日中の印象などについてインタビューして頂きました。

Q　先ず日本の国の印象は如何ですか。

A　日本は非常に美しい国です。景色だけでなく、日本国も非常に素晴しいです。

Q　次に英知大学の印象についてはどうですか。

A　英知大学はすごく新しいので驚きました。建物もきれいです。学生たちも非常に親しみ深いです。先生方や職員の方々も非常に温かく迎えて下さっています。だからすばらしく居心地がよく、まるで自分の家にいるようです。

Q　英知大学の学生はローラス大学の学生と比べ、どんな違いがありますか。

A　英知大学は寮がないので全部通学しているから、授業以外の色々な活動に参加する者がローラスに比べて少ないようです。ローラス大学は寮があって、そこに多くの学生が住んでいるので、授業が終ってからクラブや色々な活動に参加しています。その事を除けば、ローラスの学生とかなりよく似ています。例えば一時間目の授業はねむくて授業に出たがらない。その点ではアメリカも日本も同じです。まあ、同じ世代の若者として典型的な事は同じだなぁと思います。勿論学生の中には飛び抜けてよく出来る学生もいるし、いわゆる普通の学生もいます。そういう所も同じようです。違う所より、むしろ似ている所の方が多いという感じです。

Q　英知の学生に対して、こうした方がよいと思われる点？(勉強の事でも、そのほかの事でもよろしいが)

A　英語に関して言いますと、私は英語を母国語としていますので、その有利　…を生かして英会話を担当しました。今、リサさんが来ていますね。積極的に英語を話す。英語を実際に使う事をおすすめします。そして、それを続けていくようにして下さい。リサさんがいなくなっても、その事を続けていくようにして下さい。これを強く希望します。

Q　最後に夫人のメアリーちんにお聞きします。

A　ここでの生活を非常に楽しんでいます。英知の大学が建っている立地条件が大変よいと思います。それは教会にも近いし、マーケット(買いものをする所)も近いし、どこかに出かけようと思えば駅も近い。このまわりでも色々な新しい友だちが出来ました。よく出かけて日本の文化や歴史に少しでもふれる事が出来て、きわめて有意義な時を過ごす事が出来ました。アメリカに帰ったらこちらの事をPR、宣伝しましょう。もっと大勢の人が日本へ来るように宣伝します。

Q　どうもありがとうございます。急にお邪魔してすみませんでした。

研究室だより

G・ベーキ教授(教養課程)は、
・昭和六十二年四月『心の細道』(第三版)をあかし書房より出版。
・また昭和六十二年九月『西から陽が昇る』をあかし書房より出版した。

興津憲作教授(西語西文学科)は、昭和六十二年十月一日、音楽之友社より『ファリヤ生涯と作品』を出版した。

井上博嗣教授(英語英文学科)は、昭和六十二年十月二十四日、広島修道大学において開かれた日本英文学会中国・四国支部第四十回大会で「ヘンリー・ソーロウの大地観」と題する研究発表を行った。